

「輝くもの必ずしも金にあらざるなり」

佐々木 隆

「ことわざに「輝くもの必ずしも金にあらざるなり」というのがある。このことわざはよく英語の授業でも紹介されるものだ。英語では“All glisters is not gold.”といふ関係代名詞の文法事項で取り上げられることが多い。先行詞は All で、そのあととの関係代名詞 that が省略されているといった解説が定番だ。

このことわざは、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』（第一幕第七場）の「三つの箱選び」で金の箱の中に入っていたコメントである。金、銀、鉛の三つの箱の中に自分の愛する人の絵姿が入つていて、その絵姿の入っている箱を選んだ人がその絵姿の人と結婚できるという設定で、どの箱に入っているかは誰にもわからない。ヒントは箱の外側に銘文が刻まれているのである。金、銀、

鉛の箱には次のようにある。

われを選ぶものは衆人の求むるものを得べし
われを選ぶものは分相応のものを得べし
われを選ぶものは所有するすべてを投げうつ
べし
(第二幕第七場、小田島雄志訳より)

金の箱の中には次のような文章が入つていた。

輝くもの必ずしも金にあらざるなり

(第二幕第七場、小田島雄志訳より)

銀の箱には次ぎのような文章が入つていた。

この箱は七たび火もて鍛えられしものなり、
思慮もまた同じく七たび鍛えられる要あり
(第二幕第九場、小田島雄志訳より)

そして、鉛の箱には次ぎのような文章が入っていた。

「うわべのみによりて選ぶものとは異なり、
眞実を選びあてし汝こそさいわいあり。」

(第三幕第二場、小田島雄志訳より)

これらの銘文は、"appearance and reality"（「外見と実体」）の問題を考える時には、必ず取り上げられる台詞である。この「外見と実体」のテーマは、世の中を生きて行く上で最も気をつけるべきことでもある。理屈ではわかつても、實際にはなかなかうまくいかないものである。

もちろん世の中には美しいみせかけに醜い心をかくしている人がよいぐいる

(『十二夜』第一幕第二場、小田島雄志訳より)

「人は外見ではわからない。人を外見で判断して

「はいけない」といつたようなことはよく耳にする表現だ。しかし、いきなり人の内面を見るすることはできない。いわゆる第一印象と外見から判断している場合が多くないだろうか。できる」とは、「思慮もまた同じく七たび鍛えられる要あり」かもしない。

実際の世の中はどうであろうか。人材登用での面接でも同様だ。書類上は学歴や経歴が優れていても、面接になると、はてなマークの付くような人はいないだろうか。面接ではなかなかの印象の人でも、実際に採用してみると、全く別人のようになってしまふ場合もある。面接官が十分にそこの人の本質を見抜けなかつたと判断するか、あるいは、面接を受けた人物がその場だけをうまくとりつくろつたということになるのだろうか。

また、就職などでも、本社ビルは立派で東証一部上場で世間的には誰もが知っている会社でも、いざ入社してみたら、全く違うという場合もある

だろう。自分にとって何が重要であるかを今一度確認する必要があるだろう。いづれにしても、「人を見る眼」、「物を見る眼」はどうしたら身に付くのだろうかと日々思うこの頃である。